

山地酪農とは

戦後まもなく植物学者猶原恭爾博士によって提唱された山地を活用した放牧酪農。最近では低投入持続型酪農として注目を浴びつつある。

- 1、シバ型放牧地
 - ①日本在来のノシバを利用した山地放牧
 - ②無施肥でも生育する生育旺盛なノシバ
 - ③戦前は全国各地にシバ放牧地があった。

- 2、林間放牧
 - ①針、広葉樹問わず林間の下草を牛の餌として活用。
 - ②木の葉、笹、雑草を含む林間の下草のほとんどを牛は食べる。
 - ③間伐を強めに行い林床に日光が届くような環境を作れば自然にノシバが蔓延る。

- 3、育林放牧
 - ①針葉樹の若齢植林地での下草を活用した放牧。
 - ②植林地では約10年程度は下草刈りを行わなければならないがこれを牛の採食で代替させる。(舌草刈り)

- 4、憩いの森
 - ①下草や灌木などの藪が牛の採食によって消滅して明るい森に変わることによって人間が森林内の探索が出来るようになり憩いの森となる。

- 5、林業との共生
 - ①林業の経済スパンは3～50年と長いがそこに牛を放牧する事によって安定した収入を確保できる。

- 5、安心安全な生産物
 - ①野山を自由に行動するまったくストレスのない健康な牛が育つ。
 - ②天然の野草を食べて取れた究極の自然な牛乳が生産される。

- 6、ミニプラントの建設・製品の製造
 - ①商品を製造するミニプラントの設計、建設のノウハウと製品製造のノウハウを有している。

- 7、後継者の育成
 - ①牧場スタッフは現在12名いるがそのほとんどは将来、山

地酪農を目指す 20 代の若者でその半数が女性である。

- ②夏休みを中心に農学部の学生が毎年 2～300 名の研修を受け入れている。最近は農学部以外の学生でも農業、酪農に興味を示している若物が多くなった。

8、商品の販売

- ①中洞牧場の直売店は銀座松屋百貨店、東武池袋プラザ館店、名古屋高島屋店の直営店 3 店舗と通販などが主な販売である。